

もっと広がる
クサリの世界

ステロイド外用剤

炎症性皮膚疾患の治療に用いるステロイド外用剤は、炎症を抑える働きのある副腎皮質ホルモンを化学的に合成し、薬効成分として配合した薬剤です。副腎皮質ホルモンの持つ抗炎症作用や抗アレルギー作用を局所で発揮し、また全身への影響が少ないことから、治療には欠かせない薬の一つとなっています。

塗り方や部位に注意

ステロイド外用剤を使う場合は、一般的には次の点に気をつけながら使いましょう。①優しく塗る。薬を擦り込まず、優しく伸ばす②適量を塗る。大人の人さし指の先から第1関節まで薬を載せた量(25~50mgチューブの場合で約0.5g)を大人の手のひら約2枚分の範囲に塗る③長期使用しない。5、6日間使用しても症状が改善しないときは使用を中止する④通常1日1、2回塗布する。症状が改善してきたら回数を減らすか、ノンステロイドタイプの皮膚用薬に切り替える。処方薬について医師の指示がある時には指示通り使用するが注意点です。

医療用ステロイド外用剤の作用の強さは「ストロングスト」「ベリーストロング」「ストロング」「マイルド」「ウィーク」の5段階に分けられます。市販薬に使われるのは「ストロング」「マイルド」「ウィーク」に属する成分です。現在は、作用の強いタイプから使い始めて徐々に弱いタイプに移行していく「ステップダウン療法」が主流になっています。炎症が起こっている部位によって、ステロイド外用剤を使い分ける必要があります。ステロイド外用剤の吸収率は腕を1とした場合に、頭皮3.5倍、手のひら0.8倍、足裏0.1倍と皮膚の厚さによって異

なります。最も吸収されやすい部位は頬(13倍)や陰部(42倍)です。吸収率の高い部位ほど長期連用した場合に局所性の副作用が出やすくなりますので、注意が必要です。顔や皮膚の薄い部分に使う場合や、小児や高齢者が使う場合、ステロイド外用剤の強さを1ランク下げるか、ノンステロイドタイプの皮膚用薬がおすすめです。乳幼児にステロイド外用剤を使用する場合は、まず医師や薬剤師に相談してみるとよいでしょう。

(伊藤 邦彦・県薬剤師会常務理事、
県立大薬学部教授)

<毎月第4火曜日に掲載>